農業経営者ルポ

# 「この人この経営」第10回

## 農法、経営、人、環境の全方位型農業を目指す

文　宮崎隆典

次男篤さん（左）と三男武さん（右）

**農業生産法人　㈲松本農園**
**代表取締役　松本博美さん（64歳）**

〒861-2203
熊本県上益城郡益城町上陳838
☎096-289-1555

**【プロフィール】**
熊本県益城町生まれ。昭和30年、熊本県立農業高校卒業。すぐに家業の農業に従事。同50年代早々に「熊本県有機農業研究会」理事、「益城町農業協同組合」理事を務める。一方で経営多角化のために縫製会社「松本パッキング」を設立（平成11年暮れに閉鎖）。また、農業生産を会社組織とし、「㈲松本農園」を10年前に、農産物の流通を担当する「㈲グリーンフォーラム」を3年前に立ち上げた。常に収益を意識した農業経営を目指す。環境を重視し地域にとけこむ、独自の大規模農業を体系化しつつある。

### 息子二人を得てトロイカ式経営

熊本市の外れにある熊本空港のすぐ近く、上益城郡益城町に「松本農園」はある。年商3億円を上げる農園の経営者は松本博美さん（64歳）。次男篤さん（37歳）、三男武さん（32歳）を加えた親子3人によるトロイカ経営を土台として、町内で32haの田畑を独自の有機低農薬農法で耕す。さらに鹿児島県で17haの畑を契約栽培し気候差利用の〝南北連携栽培〟を取り入れ、経営の幅を広げている。

アイデアは他にもいっぱい。オリジナル堆肥による高品質野菜づくり、タニシを使っての水田の除草などの他、水資源涵養のためハウスを避ける露地栽培、水浄化のため堆肥に木炭を入れる〝究極〟の環境農業も導入。農法、経営、人づくり、環境保護を一体とした新しい全方位型農業を目指す。「5、6年先に農業がドラスティックに変わる」と見通す松本さんの、いまの営農ぶりを見ながら、全方位型農業の時代の意味を考えてみよう。

### 有機低農薬農業への転換

まずは農法について、有機低農薬農業から環境保全型農業へ進化していった歩みを見る。

幼児期に父を失くし農業を手伝って成長した松本さんは、農業をやる強い意志をもって農業高校を終えた。昭和28年に農業に就き、結婚し3子をもうけスイカ、キャベツなどで儲かる農業に励むうち、妻が農薬で健康を壊した。農薬を減らさないとダメ！　と有機低農薬農業への転換を決意、これが大きなターニングポイントとなった。

昭和50年代初め、全国縦断的に有機農業者を組織していた「マルタ有機農業生産組合」（現在組合員約800人）に加入。仲間と研鑽を積み、組合が学者のアドバイスを得て開発した有機堆肥を施用し効果を上げた。いまでは一級品の作物をつくっているとの揺るがぬ自信を持つまでに。

しかし組合から買う堆肥は20kg1、800円。このコストでは大面積をカバーできないと、何年か後に独自の堆肥をつくることにした。畜産農家から家畜糞尿を、また隣家のエノキダケ栽培者から使用済み菌床のオガクズをもらってきて、これに自作米の籾殻や稲藁、市販の米ヌカを交ぜて発酵堆肥をつくった。失敗を重ね10年ほどでこちらも一級品の堆肥に仕上げた。

最近では、東南アジア産木炭の粉を交ぜているのが自慢。微生物の繁殖が良く、発酵が高まるのがメリットだが、

地下水へ浸透する畑の水を浄化しようというのが真のねらい。有機低農薬農業を追究するうち、松本さんは「環境を大事にしない農業なんて農業じゃない」と思うようになったのだ。

もちろん経営のことは常に頭にあり、木炭の粉も、コスト引き下げのため2年に1回、20tコンテナ1個分を輸入してまとめ買いしている。

「熊本の農業の神様といわれる松田喜一さんの教えが"人つくれ、土つくれ、作つくれ"でした。農業の基本は何といっても土づくり。試行錯誤を経て完成させたオリジナル堆肥はワシの農業の基本」と松本さん。

19年前、後継含みで農業を始めた次男の篤さんが土づくりを引き継いでおり、親に負けじと言う。「堆肥のコストがざっと今1t1万円。これをあと何割か安くするまではまだゴールじゃない」。親譲りの貪欲さが頼もしい。

## 環境農業へのこだわり

有限会社・松本農園の現在の耕地は、畑が26ha（うち自家所有地は4ha）。水田が6ha（同1ha）。耕作放棄地などを借りて少しずつ増やしてきた。従業員はパートを含め26人という陣容。ほかに20年前から鹿児島県山川町の農家と契約し、17haでニンジンとサツマイモを栽培してもらっている。

自作の作物はニンジン、サツマイモ、タマネギ、ソラマメ。かつてつくった葉ものは農薬が多くなりがちなので、根菜類中心に切り替えた。最も大変な除草は従業員総出で行う。ニンジンの場合、長い柄のついた鎌で草の小さいうちに列間の草を引っ掻いて取り、ニンジンの中の草は手で抜く。

30aを20人で半日かかるが、除草剤はよほどのことがない限り使わない。病害虫についてもしかり。土が肥えると病害虫被害は出にくいのだ。環境農業へのこだわりが、農法の技術向上をもたらすのだろうが、これだけの大面積を有機低農薬でやる体系をつくったのは見事というしかない。

環境へのもう一つのこだわりは、ハウス栽培をしないこと。ハウスの連棟が全国どこでも普通になってきたが、ハウスは雨水を一気に流し去り、その水は川へ流出し、耕地から地下へ浸透する水は減る一方なのだ。水田の休耕も10aで1千tの水を失うことになるとの専門家の推計もある。よしやめよう！　熊本でならハウスなしでも野菜づくりはできる、と育苗用を除いてハウスとオサラバしたのだ。

## 南北連携栽培のメリットと将来

次に経営について。鹿児島との南北連携は、生産地の気候差を生かす長期

発酵させた牛糞をさらに寝かせて完熟させた後、畑に投入している。切り返しは大型ホイールローダーで行う

ハーベスタによるニンジンの収穫。九州は機械化では後れをとっている地域だが、松本農園では積極的に機械化によるコスト削減に取り組んでいる

間の出荷が狙い。鹿児島でつくっている作物はニンジンとサツマイモで自作と重なるが、出荷体系が次のように拡大するのだ。▼ニンジン：11～2月＝熊本、3～4月＝鹿児島、5～6月＝熊本。▼サツマイモ：6～10月＝鹿児島、11～5月＝熊本。

サツマイモは通年、ニンジンはもう少しで通年という状態で、他の作物を合わせると1年中、何点かを出荷する体制となっている。出荷先8割がマルタ組合経由で生協などへ、ほかは松本農園のファンへの個別産直。このところ熊本の市場から「ぜひウチへも出荷を」とトラックを差し向けられ、強い追い風を受けるようになっている。

新品種の「金美ニンジン」の栽培も昨年より手がけている。今年2年目にしてようやく栽培のコツが解ってきた。また、ニンジンの箱は松本農園内部でデザインしたオリジナルデザインだ

鹿児島の農園は耕作者が高齢なので、耕作を中止したら松本農園支部として栽培を引き受ける方針だ。益城町でも高齢化による耕作放棄がだんだん進むだろう。だから100haぐらいまでなら拡大する用意がある。高品質野菜づくりのノウハウと人があるのだから、悠々できるはず。「やる気と能力のある人にとって農業ほど魅力のある職業はない。5年先には農業が変わる。目を見張るほどにね」と松本さん。

## 人を大事にする経営哲学

原稿では最後になったが、松本さんが最も重要視する人づくりについて。

6年前まで三男は、大手化学企業のサラリーマンだったが、松本さんが農業の将来性を説き、「サラリーマン以上の給料を払う」と呼び戻した。そして次男に農業の現場を、三男に各種の技術開発と営業を担当させ、競わせている。性格を見抜いた適材適所主義だ。

二人は相手の仕事に厳しく注文を付け合い論争もし、三男は「偉大な親父も、手本の兄貴も越えるつもりでやってます」と気の強いところを見せるが、出荷などの総がかりの作業では、息の合ったコンビぶりを見せる。余談ながら長男は国立大学工学部の助教授だ。松本さんは次男、三男を引っ張り込めばもう後継には十分と思っている様子。でも、5年先のことは分からない？

近々、次男が社長に、三男が専務になる案が偉大な父親から示され、二人は経営の要諦を叩き込まれている。見通しの立たない設備投資はするな、などと。500坪の選果場（敷地3000坪）を2億円の投資で2年前に完成させ、社長としてインフラを整えたところからのなんと現実的な説示であることか。「選果場の20年返済の見通しは堅い。20年先までワシも元気に働くんだという元気の素までワシは見込んでるぞ」と次期会長はおどける。

従業員への思いやりも格別だ。通年労働体制をつくっているほか、妻が若いとき農薬で体調を壊した体験から、従業員の健康に気を遣う。「家族の夕飯に店屋物なんか買って帰るな。必ず手料理をつくってやれ。材料は無農薬のウチの規格外品を持っていけ」と。

農業研修者も喜んで受け入れている。今は某大学の大学院を終えた就農希望の青年と、ブラジルからのJATAKの研修生の2人がいる。ブラジルの青年は日系二世の大農場の後継者だそうで、「日本で変わったといわれるようになれ！」と檄を飛ばしている。

人づくりとは、本人が学ぶことなり――。「つまり学ぶよう仕向けることです。研修生たちの学ぶ姿勢は、それは感動的。やる気満々なんです」。松本さんが教育者のような口調で言った。

松本農園では地域に先駆けて機械化除草に取り組んでいる。除草剤を使用しない分、ローコストの経営が可能だ

**宮崎隆典（みやざき・たかのり）**

熊本市生まれ。早大政経卒。読売新聞記者（婦人部など）20年のち、1990年にフリーに。農業、食料、環境を主テーマに執筆する。海外取材も多い。著書に「甘夏に恋して」「食革命に挑む」（以上コープ出版）「環太平洋コメ戦争」（集英社）などがある。